

「地理」における「用語」に関する課題

秋本弘章 (獨協大学)

地理教育で用いられる用語の問題の存在は、岩田 (2013) らによって指摘されてきた。岩田は誤った使い方、誤解を招く用語の具体例として「造山帯」を取り上げた。その後、山本らは教科・科目による用語の違いについて検討を行った。本発表は、その後の地理教育にかかわる用語に関する問題の動向について述べる。

まず、岩田の指摘した「造山帯」に関しては、これまで、教科書にしばしば「低くならかな古期造山帯」などと地形と造山帯を結びつけて説明されていた。現在、「造山帯」は地質用語であり、「地形」と結び付けることは学術上適切ではないとされる。しかし、1980年代までは地形学辞典等においてもこれまでの教科書と同様な記述がみられた。つまり、研究の進化によって生じた問題といえる。現在では、この問題はほぼ解消されている。

同様の例として、「扇状地」がある。斎藤 (2022) によれば、「扇状地」は「河川が作る地形」という書き方は完全な誤りではないが、正確ではないと指摘する。すなわち、1970年代までは、扇状地の形成に関して、専門書でも「河川が形成する」としていた。1980年代に扇状地の形成に「土石流」が関与することが指摘されるようになり、2000年代になると専門書でも「土石流」の関与が明示されるようになった。こうした成果が「教科書」に反映されるのはその後になるというのはやむを得ないことであろう。

しかし、用語の問題はそれだけではない。山本ら (2017) は、教科・科目間の用語の違いを指摘している。地理—地学間の広がる境界—発散境界、狭まる境界—収束境界などである。地理と生物の間では熱帯雨林—熱帯多雨林、サバナ—サバンナを用いている。これの多くは外国語を翻訳する際、あるいは外国語をカタカナ表

記する際の問題ともいえる。これらはある意味「方言」みたいなもので、どれが正しいということもない。教員がそのことを認識していればよいだけである。研究レベルになれば「英語」で表現されるので大きな問題はないと考える。

より大きな問題としては、地理特有の用語がある。例えば土壌に関する用語である。そもそも土壌に関する用語は国際的用語においても完全に統一されていないうえ、様々なローカル用語があること、加えて外国語の日本語表記の問題などがある。これに関しては地理学の専門家や地理教育の専門家のみでは解決できるものではない。また、気候区の名称の統一性のなさも問題であろう。

ここでは、自然地理関係の用語について記したが、人文地理関係の用語にも様々な揺らぎがあるがそれについては今後の課題としたい。

参考文献

- 岩田修二 (2013) 高校地理教科書の「造山帯」を改訂するための提案. E-journal GEO. 8(1). pp. 153-164.
山本政一郎・小林則彦 (2017) 学校現場で混乱が生じている地理・地学用語. 地理 62(9). pp. 94-99

秋本弘章 (獨協大学)

hakimoto[at]dokkyo.ac.jp